

# 刀 林

題字 故前田和二郎名誉教授  
発行所  
東京都新宿区信濃町 35  
慶應義塾大学医学部  
外科学教室同窓会(刀林会)  
発行人 吉野肇一

## 外科学教室 教室主任 就任



慶應義塾大学医学部  
外科(脳神経) 教授  
吉田 一成 (59回)

1980年、私がいわゆるフレッシュマンとして、慶應義塾大学外科学教室に入局した時には、当教室は、一般消化器外科、胸部外科、脳神経外科の3診療科から成り立っておりまして。現在では、胸部外科が、心臓血管外科と呼吸器外科に分かれ、小児外科が、一般消化器外科から分離し、5診療

科からなる大教室となっております。この34年の間で、私の脳裏に強く刻まれた出来事は、医師臨床研修制度の改革によって、初期臨床研修医が、教室に所属しなくなったこと。私どもの時代は、外科学教室に入局すると、全員、フレッシュマンとして、1年間の同じカリキュラムでの研修を受

けおりました。初期臨床研修制度の改革により、現在は、卒業3年目で、外科学教室に入局してきます。私どもの脳神経外科では、この時点で、脳神経外科専門教育を始めております。他の4診療科では、変遷はありましたが、今後は、1年間の関連病院出張の後に、所属する診療科を決めることになりました。いわゆるフレッシュマン研修として、全員が同じ施設で同時に研修を受けることがなくなり、診療科間の絆が細くなつたように思います。今後は、専門医制度の改革により、基本的診療科としての専門医とその2階部分の subspecialty の専門医

という位置付けになり、研修制度も変容して参ります。これまでの制度改革が、必ずしも、改善につながってきたとは言い難い面もありますが、初期臨床研修医の status が確立されたことや、一般人にはわかりにくかった専門医制度が、ある程度、同一の基準となり、authorized されていくであろうことなどは、評価されると思います。私の属する脳神経外科では、初期臨床研修制度の改革により、全国的に脳神経外科入局者数が、3割程度減少しました。初期臨床研修に脳神経外科が必修ではないことによるところが大きいと思います。他の診療科にも同様なことが起きていくと聞きますし、初期臨床研修施設を志願者とのマッチングで決定することから、地方で研修する初期臨床医が減少し、社会問題となつてい

ます。一方で、専門医制度の改革を、医師の地域偏在の解消につなげようとする動きもあります。慶應の外科学教室は大教室で、他学部は、その良さを習得したという話も聞きます。大教室の良さを維持するためには、先に述べたような制度改革に期を逸せずに対応していく必要があります。昨年、10月、外科学教室主任に就任させていただきましたが、この立場になつて初めて見えてきたものが多々あります。よき伝統を守り、時代の変革に適切に対応していくことの必要性を身に染みております。慶應義塾大学外科学教室の更なる発展のために、微力ながら、誠心誠意取り組んで参りたいと存じます。

## 平塚市民病院 病院長就任



平塚市民病院 病院長  
金井 歳雄 (59回)

私、金井歳雄(外科、59回)は石山直己前病院長(脳51)の退職に伴い、平成25年4月、平塚市民病院院長を拝命いたしました。これは、平塚市病院事業管理者別所(外50)、石山前病院院長ならびに外科学教室北川雄光教授によるご支援の賜物であり、深く感謝いたします。もとより浅学非才の身であり、十分な実績をあげられるか不安であります。在籍26年の経験と志を武器に、新しい病院作りに力を注いでいきたいと考えております。

私は、入局後、都築俊治助教率いる胆道班に所属し、国立がんセンター研究所等で病理の研鑽を積んだ後、昭和63年に当院外科に出向いたしました。市中病院での安全な肝切除の確立をメインテーマに、肝臓腫瘍の充実に取り組みで参りました。平成11年外科部長拝命後は、後進の指導にも心を砕き、スタッフには「外科は逃げない」という姿勢を示し、若手外科医とは手技にまつわる禅問答

を、臨床研修医には外科の魅力の伝導をしてきました。公立病院はすべからず赤字体質で、公立病院改革がイデオラインでは経営形態の変更まで考慮することが求められております。当院は、平成22年から地方公営企業法の全部適用になり、管理者が設置されました。これ以後、数値目標管理、定数対策、医師待遇改善、企業会計の早期導入等、積極的な病院経営が可能になつて

おり、旧態然とした公立病院からの脱却を図っております。さらに、平成27年度中に完成する新病棟を中心にして、神奈川県西部、湘南地域の高度急性期型、災害対応型の、公的使命を帯びた高機能の教育的病院にしていきたい、と考えております。診療領域としては、救命救急、心臓大血管、周産期、がん診療をメインの看板にしていきたい。具体的には、救急ワークステ

ーション、DMATなどの Field Medicine、外傷や急性腹症を扱ふ Acute Care Surgery、e20列CTによる心血管診断、心外科手術、大動脈ステントグラフト、血管外科治療、脳血管内治療、鏡視下手術、消化器内視鏡治療、高難度がん手術、IVR-CTを駆使したインターベンション、定位放射線治療、前立腺レーザー手術、などが診療の目玉となります。



# 栃木県立がんセンター病院長就任



栃木県立がんセンター  
病院長  
菱沼 正一 (57回)

平成25年4月1日付けで栃木県立がんセンター病院長に就任いたしました。歴代病院長のうち三代目が尾形佳郎先生(現名誉病院長、41回)で、私が七代目になります。現在、当センター常勤医58名中、三四会員は14名で、うち刀林会員は固武健二郎(54回)、菱沼正一(57回)、稲田高男(58回)、尾澤 巖(60回)、菅野康吉(60回)、安藤二郎(64回)、藤田 伸(64回)、松井孝至(69回)、富川盛啓(70回)、森谷弘乃介(83回)の10名で、外科レジデントとして水口知香(88回)が研修3年目に入っています。

当センターの歴史を振り返ってみますと、昭和46年に当センターの前身である「栃木県立がん検診センター」が開所し、その後県民からの強い要望もあり、昭和61年9月に検診から治療までを一貫して行うがん専門病院として「栃木県立がんセンター」が開院しました。以来、県民の高度かつ増大する需要に応えるべく、病棟の拡充や高度医療機器の積極的な導入を図り、「学問に裏付けられた最高の技術を愛の心で」を基本理念として、患者さんと職員とが互いに心を開いて和むことのできる診療を目指してまいりました。

平成19年には都道府県がん診療連携拠点病院に指定され、県のがん医療の中心機関として高度ながん医療を提供できる診療体制を整えました。さまざまながんの病態に応じ、手術、放射線療法、化学療法を効果的に組み合わせた集学的治療が実施可能です。他施設では対応が困難な難治がん、高度進行がん、再発がんなどの患者さんを積極的に受け入れ、高度な技術を駆使した手術はもちろん、患者さんのQOLの向上を図るために各種の治療やケアを行っている。出身大学などは問わず、各診療科間の協力体制は緊密で、大病院などでは見られない「小回りのきく」診療体制は、当センターの大きな特徴でもあります。

28年目を迎えた当センターは現在転機を迎えており、経営形態の見直しを始め、老朽化しつつある病院の改築・移転などの中・長期的な課題にも真剣に取り組んでいかなければなりません。一方、医師・看護師不足の問題、地方財政の厳しさなど、当センターを取り巻く経営環境は厳しさを増している状況にあり、このような中で、引き続き県民から求められるがん医療を適切に提供していくためには、経営改革と医療の質の確保との両立が重要です。病院長として舵取りの難しい局面に立たされておられる身を引き締まる思いですが、慶應関連病院としてこれからも地域医療に貢献し、更なる発展を目指す所存ですので、今後ともご指導・鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

# 静岡市立清水病院 病院長就任



静岡市立清水病院  
病院長  
藤井 浩治 (62回)

平成25年4月より静岡市立清水病院院長に就任し、1年がたちました。清水病院は富士山と共に世界遺産となった清水区の三保松原に隣接し、遠く三保松原越しに富士山が望め、日本平の入り口に当たります。気候は温暖で、気温は東京より3度ほど高いようです。マリンスポーツや海釣り、川釣り、ゴルフも盛んです。静岡市立清水病院は政令市である静岡市の公的8病院の一つで、清水区に密着した病院です。地域支援病院と災害拠点病院で回復期リハビリ病棟を持つ500床の病院です。医師の出身は慶應大学、浜松医科大学、東海大学などの混成部隊となっています。当地域では医師・

看護師不足はいまだに深刻な状態です。そのため救急も二次輪番制が強く根付いており、当番日はしっかりと救急を行い、それ以外の日は基本的にオンコールのみでそれぞれの病院が得意としている分野に依頼搬送する体制です。そのため、救急搬送のたらいまわしなどはほとんどありません。また地域完結型医療として静岡市公的8病院で2次救急を展開し、「清水区の地域医療を守る」を合言葉に清水区の公的病院である桜ヶ丘病院、清水厚生病院、精神科病院である日本平病院や医師会と密接に協働しながら2次救急や地域医療を展開しています。当院は以前から地域包括ケアシステムの必要性を考え、医師会や介護業界と多職種連携を行ってきており、急性期リハと回復期リハ、口腔外科や歯科医師会による口腔内ケアを以前から推進してきました。現在の目標は、清水区の二次救急医療から在宅医療の後方支援までをしっかりと手掛けることです。救急部門では、現在ICUを

建築中で平成27年4月には開業予定です。10年以上回復期リハ病棟を維持してきたノウハウで、今年度中には地域包括ケア病棟も開設予定です。清水区は人口約24万人ですが高齢化率は約28%と高齢化が進んだ地域であり患者も高齢者が多くなっています。そのため以前から地域包括ケアシステムが盛んで、地域の互助を基盤としつつ、介護部門と医師会を中心とした地域包括ケアシステムに二次救急病院が参加し後方支援する体制を作っています。

今後の少子高齢化による医療費の増加、人口構成の変化に対応していく地域医療の先例になるべく努力していく所存です。

丸山記念総合病院は明治29年に内科、産婦人科の診療所から始まり、本年度118年になる240床の総合医療機関です。現在は内科、外科、整形外科、産婦人科、小児科、麻酔科など14科を標榜し、常勤医師数は32名で、非常勤医師は97名を数えます。当院はさいたま市岩槻区(人口12万)

# 丸山記念総合病院 院長就任



丸山記念総合病院 院長  
米川 甫 (51回)

平成25年3月に静岡市立清水病院を定年となり、5月から丸山記念総合病院の院長に就任致しました。前任地では外科は主に浜松医科大学の中村達学長、今野弘之教授にお世話になり、また脳外科、整形外科、産婦人科、小児科、皮膚科など多くの三四会員のご支援をいただきましたことに感謝いたします。在任中にはDPC導入、地域医療支援病院の認定、ICU新設の決定などに関与し、10年ぶりの病院の黒字化もあり、名誉院長の称号もいただきましたが、これも皆様のご支援の賜と感謝しています。

丸山記念総合病院は明治29年に内科、産婦人科の診療所から始まり、本年度118年になる240床の総合医療機関です。現在は内科、外科、整形外科、産婦人科、小児科、麻酔科など14科を標榜し、常勤医師数は32名で、非常勤医師は97名を数えます。当院はさいたま市岩槻区(人口12万)

この4月からの診療報酬改訂は当院の様な中規模の病院を強く直撃することになります。病診連携、病病連携を強化することが最大の対策と考えています。このため地域連携室を6に増員し、また感染対策、安全対策などの講演会を医師会に開かれたものにして、地元の方との関係を深めていきます。新しい診療報酬のもとでも医療・看護必要度や在院日数は7・1の基準をクリアできますので当面は急性期病院として頑張りたいと考えています。

今後とも刀林会、三四会の諸先生のご指導・ご支援を宜しくお願い申し上げます。

# やぶにらみ退任挨拶



独立行政法人国立病院機構  
東京医療センター名誉院長  
松本 純夫 (52回)

平成17年4月に国立病院機構東京医療センターに院長として着任し、平成26年3月まで9年間在籍しました。藤田保健衛生大学を定年まで努めることなく坂文種報徳会病院長を辞しての異動でした。当時の医学部長北島政樹先生の勧めもあり臨床医として最後の期間を母校慶應のために尽くすのもよいかと考えた末の決断でした。東京医療センターの名称は国立病院が平成16年に独立行政法人化されてからのものであり、それ以前は「東二」として都民にも長く親しまれてきた。今でもタクシーに乗ったときは「東二」と言ったり方角が通りがよいこともある。慶應義塾大学医学部出身の医師が多く在籍し、関連病院としては最大規模の施設である。それを好んで受診してくださる患者さんも多いことは嬉しい限りである。

着任当初の挨拶回りで開業されている大先輩から言われた苦情が思い出深い。患者者を急患として送った

ら、「忙しい目に遭わせるな」と叱られたことがある。決してそのようなことがないように病院運営をせよと決まっていた。着任した印象では職員は時間外診療もよくこなしていたので不思議に思い、「何時頃のことですか？」と伺ったところ、「20年前くらいか」とのことであつた。確かに昭和の最後の頃は国立病院全体の姿勢が問われた時代であつたので、平成になつてからの診療姿勢の変化はご存じないかと思ひ、「最近では救急診療に力を入れていきますので、お断りするようなことはありません」と答えたが、病院運営に旧国立病院の気風が残っていないか見極めてみようと思ひ、そのような記憶がある。そのような目で見渡すと、若い職員よりも古い職員に旧国立病院の気風が残っているように感じ、時間をかけて修正することに努めてきたので成果についてご批判を受けた。最近では職員の対応が優しい、親切、すべての医師が白衣の前を締めているの

がすがすがしくて好ましいとの意見を多く聞く。

診療面で留意したのは時間外診療の充実、内視鏡外科や不整脈治療も含めた心臓カテーテル治療、エンドバスキュラーステント等の患者にとつて負担の少ない低侵襲治療の充実である。低侵襲治療の充実である。低侵襲治療の充実である。低侵襲治療の充実である。

安全な内視鏡手術は外科医と手洗い看護師のチームワークにあると考え、院長協議会で提案したところ応援を受け国立病院機構内視鏡外科研究会主宰で日本内視鏡外科学会が承認する研修を開始した。現在は機構本部も承認した研修となつている。チーム医療の促進につながつていると思う。

在任中は医師不足施設への医師派遣も含めて機構内の若手医師の施設間交流にも意を払ったが、この数年は海外も含めた人材交流にも救命救急センターと協力して努力した。とくに豪州の救急医療、高齢者医療、地域医療、かかりつけ医制度の研修は豪州大使館、連邦政府、ビクトリア州政府の協力も得て継続的交流をするまでに成長した。この成功には研修管理委員会外部員の高久裕氏の助力によるところも大きく人の輪が重要であると痛感している。

平成16年に初期臨床研修制度が始まってからマッチング1位希望が市中病院では常に3位以内にランクされたことも嬉しいことであつた。総合診療内科をはじめとして、各診療科の馬鹿丁寧とも思えるようなきめ細かな指導が評価されていると思つている。また平成22年には付属の看護助産学校を残念であつたが閉校し、東京医療保健大学と提携してクリティカル領域の診療看護師 (NJP: Japanese Nurse Practitioner) 養成に日本で初めて取り組んだ。日本医師会や一部の看護大学からは反対の声が聞こえるが、実際に育った3期生ま

を見てみるとミッドプロバイダーとして日本の医療現場に役立ち変革させる存在であると確信している。公務として平成16年から厚労省の保健医療専門調査員、平成25年から内閣官房の高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部新戦略推進専門調査会委員を務めているので、今暫く日本の医療環境を国民にとつてよりよいものとなるよう努力したい。

平成22年からは水野嘉夫先生の後任として慶應義塾大学関連病院会会長に就任した。医学部長と共に教育中核病院、診療科特異的教育中核病院の選定を進めた。同時に各教室の卒業教育プログラムの相互理解を促すようにシンポジウムを三四回の協力も得て行った。関連病院は医学部の卒業後教育充実のため重要な存在であるが慶應から距離のある関連施設は他大学出身者との共存が必要である現実がある。それらの事情について認識の低い教室主任も存在するため認識を変えようとする必要があつた。医師が派遣できないようになったときは代わりうる派遣元を紹介し補完的に医師派遣を受けられるようにすべきと考えているが如何であろうか。医学部内をみると無休医局員の根絶は評価できる改革であつた。関連病院人事は大学に集まる医局員の数に影響を受けると集約と分散を繰り返してきた歴史がある。長年続いた関連病院が櫛の歯が抜けるように少なくなる現実をみて、今後は医学部執行部と関連病院の連携協議会が上手く機能し教育中核

病院の確保を図れることを希望している。国立病院機構の院長協議会会長も2期4年間務めたが、どの地域をみても医師派遣元の大学との距離感調整に気を遣つている事実があり、慶應だけが苦勞しているのではないと言及したい。

自分自身のリサーチとしては大学に置いてきた感があるが、平成17年には第3回日本ヘルニア研究会、同19年に第25回臨床研修研究会、同19年に第28回癌研究会、同19年に第28回癌研究会、同24年に第25回日本内視鏡外科学会を担当した。協力してくれた外科を始めとした各診療科スタッフ、事務、秘書等に感謝したい。しかし院長在任9年間を支えてくれた秘書の中里有美さんを平成26年4月10日に病で失つたことは痛恨の極みであつた。治療にもかかわらず救うことができなかったが、治療にのみかかわつただけが残っている。本来であれば院長退任時にはもう少し達成感があるものと思つてはいたが、彼女を失つたことでその3割から4割を欠いた気持ちである。ご冥福を祈りたい。

「やぶにらみ」とは東京医療センター便りに連載していた院長のコラムの名称である。発行されるたびに院内ロビーや廊下で話しかけられ患者さんから文章への感想が寄せられた。よい思い出である。最後にこれまで医師人生で迷惑をかけたお世話になった恩師、先輩、同僚、後輩の関係者および支えてくれた妻と家族に感謝の気持ちを記したい。

でを見てみるとミッドプロバイダーとして日本の医療現場に役立ち変革させる存在であると確信している。公務として平成16年から厚労省の保健医療専門調査員、平成25年から内閣官房の高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部新戦略推進専門調査会委員を務めているので、今暫く日本の医療環境を国民にとつてよりよいものとなるよう努力したい。

平成22年からは水野嘉夫先生の後任として慶應義塾大学関連病院会会長に就任した。医学部長と共に教育中核病院、診療科特異的教育中核病院の選定を進めた。同時に各教室の卒業教育プログラムの相互理解を促すようにシンポジウムを三四回の協力も得て行った。関連病院は医学部の卒業後教育充実のため重要な存在であるが慶應から距離のある関連施設は他大学出身者との共存が必要である現実がある。それらの事情について認識の低い教室主任も存在するため認識を変えようとする必要があつた。医師が派遣できないようになったときは代わりうる派遣元を紹介し補完的に医師派遣を受けられるようにすべきと考えているが如何であろうか。医学部内をみると無休医局員の根絶は評価できる改革であつた。関連病院人事は大学に集まる医局員の数に影響を受けると集約と分散を繰り返してきた歴史がある。長年続いた関連病院が櫛の歯が抜けるように少なくなる現実をみて、今後は医学部執行部と関連病院の連携協議会が上手く機能し教育中核

病院の確保を図れることを希望している。国立病院機構の院長協議会会長も2期4年間務めたが、どの地域をみても医師派遣元の大学との距離感調整に気を遣つている事実があり、慶應だけが苦勞しているのではないと言及したい。

自分自身のリサーチとしては大学に置いてきた感があるが、平成17年には第3回日本ヘルニア研究会、同19年に第25回臨床研修研究会、同19年に第28回癌研究会、同19年に第28回癌研究会、同24年に第25回日本内視鏡外科学会を担当した。協力してくれた外科を始めとした各診療科スタッフ、事務、秘書等に感謝したい。しかし院長在任9年間を支えてくれた秘書の中里有美さんを平成26年4月10日に病で失つたことは痛恨の極みであつた。治療にもかかわらず救うことができなかったが、治療にのみかかわつただけが残っている。本来であれば院長退任時にはもう少し達成感があるものと思つてはいたが、彼女を失つたことでその3割から4割を欠いた気持ちである。ご冥福を祈りたい。

「やぶにらみ」とは東京医療センター便りに連載していた院長のコラムの名称である。発行されるたびに院内ロビーや廊下で話しかけられ患者さんから文章への感想が寄せられた。よい思い出である。最後にこれまで医師人生で迷惑をかけたお世話になった恩師、先輩、同僚、後輩の関係者および支えてくれた妻と家族に感謝の気持ちを記したい。

「やぶにらみ」とは東京医療センター便りに連載していた院長のコラムの名称である。発行されるたびに院内ロビーや廊下で話しかけられ患者さんから文章への感想が寄せられた。よい思い出である。最後にこれまで医師人生で迷惑をかけたお世話になった恩師、先輩、同僚、後輩の関係者および支えてくれた妻と家族に感謝の気持ちを記したい。

「やぶにらみ」とは東京医療センター便りに連載していた院長のコラムの名称である。発行されるたびに院内ロビーや廊下で話しかけられ患者さんから文章への感想が寄せられた。よい思い出である。最後にこれまで医師人生で迷惑をかけたお世話になった恩師、先輩、同僚、後輩の関係者および支えてくれた妻と家族に感謝の気持ちを記したい。

「やぶにらみ」とは東京医療センター便りに連載していた院長のコラムの名称である。発行されるたびに院内ロビーや廊下で話しかけられ患者さんから文章への感想が寄せられた。よい思い出である。最後にこれまで医師人生で迷惑をかけたお世話になった恩師、先輩、同僚、後輩の関係者および支えてくれた妻と家族に感謝の気持ちを記したい。

**gsk** GlaxoSmithKline 生きる喜びを、もっと Do more, feel better, live longer

抗悪性腫瘍剤/チロシンキナーゼ阻害剤 薬価基準収載  
製薬| 処方せん医薬品(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

**タイケルブ錠250mg**  
Tykerb® Tablets 250mg ラパニニブトシル酸塩水和物錠

※「効能・効果」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「警告・禁忌を含む使用上の注意」等については添付文書をご参照ください。

製造販売元 (資料請求・問い合わせ先) **グラクソ・スミスクライン株式会社**  
〒151-8566 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-6-15  
TEL: 0120-561-007(9:00~18:00/土日祝日および当社休業日を除く)  
FAX: 0120-561-047(24時間受付)  
http://www.glaxosmithkline.co.jp

提携 (資料請求・問い合わせ先) **日本化薬株式会社**  
〒102-8172 東京都千代田区富士見一丁目11番2号  
TEL: 0120-505-282(9:00~18:00/土日祝日および当社休業日を除く)  
http://mink.nipponkayaku.co.jp/

2009年10月作成

献血 ウェノグロブリン IH5% 静注 5g/100ml・10g/200ml  
Venoglobulin IH5% 0.5g/10ml・1g/20ml・2.5g/50ml  
0.5g/10ml・1g/20ml・2.5g/50ml  
Venoglobulin IH5% 0.5g/10ml・1g/20ml・2.5g/50ml・5g/100ml・10g/200ml (献血) (生物学的製剤基準 ポリエチレンジオキサン処理人免疫グロブリン)  
特選生物由来製剤 (処方せん医薬品) (注) 医師等の処方せんにより使用すること

血液分画製剤 (血液凝固阻害剤) 薬価基準収載  
**ニアート** 静注用 500単位  
Neuart iv 500units・1500units (献血) (生物学的製剤基準 乾燥濃縮人アンチトロンピンⅣ)  
特選生物由来製剤 (処方せん医薬品) (注) 医師等の処方せんにより使用すること

製造販売元 一般社団法人 **日本血液製剤機構**  
東京都港区浜松町2-4-1

販売 **田辺三菱製薬株式会社**  
大阪市中央区北浜2-6-18

※効能・効果、用法・用量、禁忌、原則禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

VGX-NAT (A5 1/2) 2013年8月作成

日本血液製剤機構 は日本赤十字社の血液分画事業部門と株式会社ベネシスが統合し設立した一般社団法人です

# 国立病院機構栃木医療センター

## 院長退任



国立病院機構  
栃木医療センター名誉院長  
勝又 貴夫（52回）

独立行政法人 国立病院機構の職員は現在でも国立病院時代と全く同じ純粋な国家公務員です。若いときには想像すらしなかった公務員一筋約35年間の勤めを大過なく卒業することができたのは、刀林会の皆様のお力添えが合つてのことと感謝しております。

私の公務員としての最初のステップは、後に厚労省に転じたM先生、静岡赤十字病院長I先生と一緒に国立療養所天竜荘病院に通つていたときに始まります。手術と当直とゴルフがセットの優雅な時間を過ごさせていただきました。

この後、国立療養所東埼玉病院を経て、ポストチーフとして、国立療養所神奈川病院に赴任いたしました。刀林会員はH院長、U院長、K院長、I副院長が管理職の立場で、実行部隊としては元慶大肺外科教授K先生、元大田原赤十字病院長N先生、元東茨城医療センター院長F先生と一緒に勤務させていただき診療以外にも様々なことを学ばせていただきました。症例

職業務に時間が取られ結局積み残してしまいました。17年に副院長、19年に院長になりました。国立病院機構病院では最終経理責任者は院長と定められていました。赤字病院に転落していき、赤字病院の最大任務は経営の黒字化であると考へ、全ての時間を当てる決意で外科臨床から撤退いたしました。東京医療センター院長M先生の強いサポートにより瀕死寸前であつた栃木病院内科と産婦人科に診療援助をうけ何とか持ちこたえ上昇に転じることができました。同級生のありがたみを痛感した次第です。

7年間の経営成績は4勝3敗とぎりぎりの勝ち越しです。しかし栃木医療センターの永年の懸案事項であつた新病院建築にむけ歩みを進めることができたのはせめてものことと考えています。病院全施設の新築にむけ刀林会員を含む後輩管理職に期待をする次第です。「天時不如地利 地利不如人和」

# 慶應義塾大学医学部外科

## （心臓血管）教授退任



慶應義塾大学医学部外科  
（心臓血管）名誉教授  
四津 良平（52回）

去る3月31日をもって慶應義塾大学を定年退職いたしました。平成14年4月より約12年間、外科学教室心臓血管外科を主宰してまいりましたが、大過なくその任務を終えることができました。これも偏に皆様のご温かいご指導とご厚情によるものと深く感謝しております。心より御礼申し上げます。

現在の心境は、大きな役目を終えた達成感と重責からの解放感、そして信濃町を離れる寂しさが入り混じつた複雑なものです。

振り返ると、私が現職に就いてからの12年間はあつと言う間でした。就任したころは、外科学教室の胸部外科が心臓血管外科と呼吸器外科にそれぞれの診療科として分かれた後でした。心臓血管外科の研究室は私を含めたスタッフ数人がわずか7名という小さな所帯でどのように教室運営をするかという悩みがありました。自分がこれまで取り組んできた、心臓移植や人工心臓のプロジェクトもありましたが、まずは教室の歴史・人材の流れから先天性弁膜症、冠動脈、大血管の分野に対し、いかに患者様に満足できる診療を供給できるかを考えました。これらの課題も若い教室員達と寝食を共にして一所懸命臨床に取り組み、また研究、教育に明け暮れました。教室員の皆様に感謝の念でいっぱいです。

その当時は外科系の分野で世界的に低侵襲手術（MIS）が話題になつてきて、心臓手術以外の外科では、MISが標準術式となつてきていました。私も、心臓手術にも低侵襲心臓手術（MICS）が将来大きな柱になると思いました。講師時代からMICSの新しい術式や手術器具の開発を行いつつ、僧帽弁形成術を中心に多くの手術を行つてきました。そして、教授になりました。その分、この分野における世界中の多くの著名な外科医と交流し、慶應大会議室やニューヨーク、韓国、タイなどでライブ手術を行つたことは良い思い出となっています。今でも若い後輩がタイ王国と臨床留学の交

流が続いています。現在ではMICSは当院心臓血管外科の代名詞の1つとなり、世界的代表施設として認められるまでに成長させることができましたと自負しています。昨年は、「低侵襲心臓外科の術式開発とその普及における貢献」に対し、慶應義塾から「義塾賞」受賞という身に余る栄誉を頂きました。このことは、私にとつて最も光栄な出来事であり、諸先生方には心より感謝しております。

また教室主任を6年間務める機会も得ることができました。その間は、新しい臨床研修制度が始まつており、当然外科学教室の研究制度も変化しました。昔のような慶應病院で1年間、各診療科と麻酔科を数か月間ローテーションすることはなくなりました。当然フレッシユマン時代はなくなり、出向前のフレッシユマン旅行もなくなりまし

ると、外科各診療科のローテーションが全く無く、大教室制に対する考えも変わってきたように思います。それにつれ若い教室員の「刀林会」への思いも変わつてくるのを心配します。それに

対しD3、D4の制度も教室で作成しましたが、まだまだ完成には至っておりません。

今後私の育てた後輩達が、しっかりと外科学教室の伝統を守りつつ、さらに発展させていくことものと信じております。今後の、慶應外科学教室、「刀林会」のますますの発展を祈念しております。



# 東京医科大学八王子医療センター

## 教授就任



東京医科大学消化器外科・  
移植外科学分野主任教授

河地 茂行 (68回)

2014年4月1日付けで東京医科大学消化器外科・移植外科学分野(旧外科学第五講座)主任教授を拝命致しました。本講座は東京医科大学八王子医療センターに於いて消化器外科・移植外科を担当している診療科で、1995年2月に八王子医療センター開設当初から腎移植を担当していた臓器移植部が発展する形で小崎正巳先生が初代主任教授として開講し、長尾桓先生に引き継がれ、島津元秀前主任教授(53回・現特任教授)によって現在の形である、消化器外科全般から肝移植・腎移植、腎不全外科まで多岐にわたる疾患を対象とした診療科に発展致しました。私は、2012年4月にこの診療科に准教授として赴任し、島津元秀先生の退官に伴い、4代目の主任教授に昇格致しましたが、その責任の重さに身が引き締まる思

いで日々を過ごしております。1989年に塾医学部を卒業し、阿部令彦名誉教授(30回)が主催されていた一般・消化器外科に入局後、フレッシュマン出張を終え、1991年より一般・消化器外科を主催された北島政樹名誉教授(45回)の元で、都築俊治先生(34回)を班長とする胆道班に所属しました。この時、胆道班スタッフとして帰室された島津元秀先生が、北島政樹先生が掲げられた一般・消化器外科の3大目標の一つである移植医療を実現するべく、生体肝移植開始に向けた準備を始められました。私はこの移植グループ初代レジデントとして、臨床生体肝移植の機が熟するまで、ブタやラットを使った移植のシミュレーションや基礎実験に従事し、チーフが終わる直前の1995年4月に生体肝移植第1例目

の臨床に携わることができました。その後ルイジアナ州立大学医療センター(Shreveport, USA)への留学を経て、2001年4月に胆道班スタッフとして帰室し、2008年より北川雄光教授(65回)のご高配を賜り2012年3月まで肝胆膵・移植外科の研究を積んで参りました。この間、島津元秀先生はもとよ

り、若林剛先生(61回、現岩手医科大学外科教授)、田邊稔先生(64回、現東京医科歯科大学肝胆膵・総合外科教授)など肝胆膵・移植班の錚々たる先輩方の指導を直接うけることができました。この時間が私の財産であり、ご指導頂いたすべての先生方にこの場をかりて心より御礼申し上げます。東京医科大学に於いて私に課せられた使命は、前教授が確立した体制を継承し、さらなる飛躍に導くことです。低侵襲手術から高難度手術まで個々の患者さんにあつた安心・安全・良質の外科診療を提供し、多摩地区のラストホープの基幹病院としてしっかりと役割を果たし、同時に大学病院として腎・肝移植を中心とした先進医療を推進して行く事が重要と考えています。さらに、外科の魅力を後進に伝え、入局者を増やし、講座の基盤を確固たるものにしていくことも大きな課題の一つです。今後とも、刀林会の皆様の暖かいご支援とご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

# 第50回日本腹部救急医学会総会

## を終えて



慶應義塾大学医学部外科  
(一般・消化器) 教授

北川 雄光 (65回)

今から約30年前の1983年、北島政樹先生(45回)は、当時40歳代前半の同世代の先生方とともに、本学会の前身である日本腹部救急診療研究会を設立されました。この度、この伝統ある日本腹部救急医学会の第50回総会、会長を仰せつかり、2014年3月6日・7日の3日間の日程で無事開催させていただきましたことができましたこと、あらためましてご支援を頂きました刀林会の皆様に厚く御礼を申し上げます。

企画では、選ばれた研修医諸君が自己アピールも含めたプレゼンテーションを行う場を設けました。高度の緊張を強いられる場面にも関わらず、臆することなく堂々たる発表をする研修医諸君の姿に驚かされました。また、腹部救急診療における総合的診断能力の重要性に着目し、テレビの人氣番組に因んだ「腹部救急ドクターG」を企画いたしました。この企画では、私の慶應義塾高校時代のクラスメートで救急医学の道に進んだ太田祥一先生、長谷川雄二先生にご登場頂き、準備の段階から教室員共々大変なご苦労をおかけしてしまいました。我々としては鑑別診断に難渋するであろう症例を用意したのですが、優秀な研修医諸君に見事に解き明かされてしまいました。これには少々戸惑いでもありましたが、我々の想像を上回る彼らの優秀

外科医としての立場から重症症例の病態説明や集中治療をテーマとして、若手教室員とともに診療・研究に励んでおります。今回の第50回記念学術集を主催させて頂くにあたって、先達が築いてきた志をもう一度振り返り、見詰め直すことを出発点として、これを次世代へ継承し、若手医師の育成、医療現場の環境整備へと繋げていくことへの決意を込めて、そのテーマを「志を未来へ繋ぐ」といたしました。福澤諭吉先生は「學問のすゝめ」の中で、「大凡世間の事物、進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む。進まず退かずして滞滞する者はあるべからざるの理なり」と説いています。この意味するところは、従前の例を踏襲するだけでは退歩していくので、絶えず現状を改善し前進しなければならぬ、という教えだと解釈しております。創成期からの理念を受け継ぎながら、現理事長、平田公一先生(札幌医科大学)が推進していらつしやる社会的視点からの学術的貢献や、より良い腹部救急医療に向けた社会体制・医療体制造りという次世代の大きな課題の解決に向けて一石を投じる学術集会にしたいとの思いから、副題として福澤先生の「退かざる者は必ず進む」の言葉をいただきました。

第50回記念総会ということで記念式典を企画し、同門の古川俊治参議院議員にもご祝辞を頂きました。式典に続く記念鼎談では発足の時のメンバーであられます北島政樹先生、高田忠敬先生、平澤博之先生にご登壇頂き、本学会設立当時の様子や設立の精神をお伺いする事ができました。本学会の特徴の一つである研修医

その準備においてあらためて自分自身の医師としてのスタートを振り返り、診療経験のみならず研究基盤のヒントの多くが腹部救急疾患診療にあることを再認識することができました。研修医時代の腹部救急疾患診療を通して、命と向き合うことの難しさとともにその喜びも学びました。現在も

学会の企画段階からご尽力を賜り、数多くの演題をご発表下さった刀林会員、慶大外科関連病院の先生方に深甚なる感謝の意を表したいと存じます。誠にありがとうございました。



# 第75回日本臨床外科学会総会

## を終えて



第75回日本臨床外科学会総会会長  
藤田保健衛生大学医学部  
消化器外科 教授  
前田 耕太郎 (58回)

第75回日本臨床外科学会総会を、平成25年11月21日(木)〜23日(土)の3日間、名古屋国際会議場で開催させていただきました。今回は第75回の節目の総会であり、臨床外科学会総会一世紀までの四半世紀の振り返りの総会でありテーマを「臨床外科一世紀にむけて」とし、副題を「Art, heart and science」といたしました。学会では、臨床外科学会一世紀に向けての現在のExpertの経験の伝達、次世代の外科臨床を担う医師達の現状と展望、さらには若手医師の教育、近年外科臨床で益々期待されている女性外科医の問題や現在の外科臨床のトピックを取り上げました。また特別講演では、ドリム企画としてオリンピック金メダリストの吉田沙保里さん、栄和人全日本監督、杉山愛選手との対談、ハンマー投げの室伏広治選手やトヨタ車の開発を主導された嵯峨宏英さん、日本医師会長の横倉義武さんの特別講演も行い、明日の外科臨床を担う若手外科医への「夢と希望を指す」お話をさせていただきました。また学会初日は、「ボジョレーヌーボー」にあたりましたので参加者の皆様に「樽での新酒」を用意して「名古屋メシ」と同時に「名古屋メシ」を古屋で「良く学び、よく遊ぶ」を実践していただきました。多くの参加者の方から「とてもためになり楽しい学会だった」とのお言葉をいただきました。おかげさまで6500名と過去最大のご参加もいただきましたことは、皆様のお蔭と感謝申し上げます。

の外科臨床のトピックを取り上げました。また特別講演では、ドリム企画としてオリンピック金メダリストの吉田沙保里さん、栄和人全日本監督、杉山愛選手との対談、ハンマー投げの室伏広治選手やトヨタ車の開発を主導された嵯峨宏英さん、日本医師会長の横倉義武さんの特別講演も行い、明日の外科臨床を担う若手外科医への「夢と希望を指す」お話をさせていただきました。また学会初日は、「ボジョレーヌーボー」にあたりましたので参加者の皆様に「樽での新酒」を用意して「名古屋メシ」と同時に「名古屋メシ」を古屋で「良く学び、よく遊ぶ」を実践していただきました。多くの参加者の方から「とてもためになり楽しい学会だった」とのお言葉をいただきました。おかげさまで6500名と過去最大のご参加もいただきましたことは、皆様のお蔭と感謝申し上げます。

特別演題の司会や演者の

# 第831回

## 外科集談会を終えて



北里大学医学部外科  
教授  
渡邊 昌彦 (58回)

2013年12月21日に第831回外科集談会を御茶ノ水駅前ソラシティーカルフアレンスタワーで開催させていただきました。本会は1902年に第1回が行われ、これまでに800回を優に超える開催回数誇る歴史と伝統ある学術集会です。東京大学構内にある山上会館で行われ、年末の多忙な時期の開催と多くの先生方にご参加いただきました。お忙しい中、なかなか一同に会しきれない中の久々の同門会風景でした。開催させていただいたにも関わらず、十分なおもてなしもできなかったのではと心苦しく存じております。

母校を離れて20年以上になりますが、刀林会の先生方の各領域における活躍と連携、その志の高さを改めて実感させていただきました。これからの若い先生方が、その志を継いで益々活躍してくれることを期待しています。

したこともあり、会場は常時ほぼ満席の状態です。非常に活気があり、様々な領域の外科学に関する諸問題を広く見聞することができ、また活発な討論を介し、次世代を担う若手外科医たちに良い刺激を与えられたのではないかと自負しております。最後になりましたが、部外科学教授の赤倉一郎先生が創立メンバーとして、研究会の設立に尽力されました。このたび、第69回日本食道学会学術集会を2015年7月2(木)〜3日(金)の2日間、横浜にて開催させていただきますことになりました。

日本食道学会は、1965年に設立されました。日本食道疾患研究会がその前身であり、慶應義塾大学医学部外科学教授の赤倉一郎先生が創立メンバーとして、研究会の設立に尽力されました。科学技術の急速な発達により、食道疾患に対する診断と治療は飛躍的に進歩し、外科・内科・放射線科という横断的かつ多様化したいく中で、日本食道疾患研究会では年々、様々な議論が積み重ねられていきました。1991年より掛川暉夫先生(33回)が研究会会長を務められ研究会をまとめられた後、2003年には学会へ移行し、さらに2008年には法人化され、初代理事長に幕内博康先生(49回)が、続いて2011年に安藤暢敏先生

(50回)が後任の理事長にご就任され、本邦における食道疾患に対する診断と治療の指導的役割が脈々と引き継がれています。また、学術集会の開催は、研究会時代より刀林会の先輩方が主催されることが多く、1965年に赤倉一郎先生が第1回研究会を主催された後、1979年に第27回研究会を掛川暉夫先生、1984年に第37回研究会を三富利夫先生(34回)、1997年に第51回研究会を渡邊寛先生(38回)が当番世話人を務められました。学会へ移行後は2004年に第58回学術集会を北島政樹先生(45回)が主催され、当時、私は事務局長の役を仰せつかり、学術集会の運営についてあらゆることを学ばせていただいたのを今日でも鮮明に覚えております。

2007年に第61回学術集会を幕内博康先生、2009年に第63回学術集会を安藤暢敏先生、続いて2010年に第64回学術集会を藤田博正先生(51回)が会長として素晴らしい学術集会を開催されました。私は9人目の学術集会担当者となります。あらためまして、慶應義塾大学医学部外科の先生方との繋がりの深い学会の学術集会会長を拝命し、たいへん名誉なことと誇りに思う一方で、その重責に身が引き締まります。第69回学術集会では、テーマを「挑戦とその検証」といたしました。通常演題の他、アジア地域における食道癌治療に関する国際シンポジウムや医師以外の医療専門職のセッションを設け、食道疾患治療に携わる人々の学術的交流の場となるよう企画立案中です。歴代の先輩方より受け継いだ伝統を大切に学際色豊かな学術集会にする所存です。刀林会の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。



# 病院紹介

## 東京武蔵野病院



外科部長

横田 昌明 (64回相当)

当院は道路交通情報でよく名前の出てくる、環状7号線沿いにある板橋区内の病院です。地下鉄有楽町線が開通してからは、最寄り小竹向原駅から信濃町まで40分弱と関連病院としてのアクセスの良さに恵まれております。

昭和3年に現在の地に開設された精神科単独の個人病院を母体としておりますが、昭和18年、三四会の上田守長(10回)、川村麟也、

庄寛先生方が設立された精神医学研究所の附属病院となつてから精神医学に関する諸研究、教育、臨床を一体として行う体制が整い、現在の正式な名称にその歴史を残しております。精神科637床、身体科(内科・外科・脳神経外科)49床と、民間病院でありながら規模の大きな、身体科疾患を併せて治療できる都内でも数少ない施設としてこの度創立70周年の節目を迎えました。

身体科疾患の診断・治療を担当することになります。が、身体科サイドから見ると悪性疾患、終末期医療、さらには認知症を併発した高齢者の心身両面からのサポートが可能であるという強みがあり、地域一般の患者様にも広く診療の門戸を開いてきたことには大きな意味があるものと考えています。

外科学系診療科の礎を築かれたのは、清水志郎(34回相当)・九十九大造(41回)・大谷光弘(現副院長46回)・宇治康明(27回)・小方卓(49回)の、刀林会の諸先輩方です。現在は大谷副院長のもと、脳神経外科宮崎唯雄(部長、65回相当)、外科横田昌明(部長、64回相当)が常勤医として勤務しており、外科は日々医局よりパート医として諸先生方のご協力をいただき、各々年間30〜40例の手術をこなしてまいりました。感謝の意を表すべく、筆者着任後お世話になった先生方の名前を列記させて

# 病院紹介

## 公益財団法人脳血管研究 美原記念病院



脳神経外科部長

赤路 和則 (72回)

公益財団法人脳血管研究所は昭和38年10月8日、一老年病、特に脳血管障害およびその後遺症に関する基礎的および応用的研究を行い、併せて本病患者の相談、援助をなし、もって学術の発展と社会福祉の増進に寄与することを目的」として、群馬県伊勢崎市に設立されました。翌年8月1日、この定款を基に、財団

附属病院として、脳血管障害の急性期から慢性期、リハビリテーション、在宅復帰まで一貫して治療にあたり、さらに本疾患克服のための研究を行う美原記念病院が開設されました。昭和39年の開設以来、当院は国内においていち早く脳卒中の外科的手術を手がけ、この分野の治療のパイオニア的役割を果たし、多大な業績を挙げ



きました。平成12年1月には、新病院がオープンし、施設内にガンマナイフセンターを開設しました。現在、189床であり、一般病床45床、障害者施設等一般病棟45床、回復期リハビリテ

ション病床99床です。脳神経外科常勤医師は、谷崎義生(昭和50年卒、副院長)、赤路和則(平成5年、脳神経外科部長)、狩野忠滋(平成13年、ガンマナイフセンター長)、志藤里香(平成16年卒)の4名です。病院理念は、「愛・和・学(あいわまなぶ)」であり、「愛」患者さんに対してやさしさといわわりの心を持つ、「和」職員は互いに助け合い協力しあう心を持つ、「学」自分自身に対して向上心を忘れず学ぶ心を持つ、です。



「効能・効果」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌を含む使用上の注意」等については、添付文書をご参照ください。

5-HT<sub>3</sub> 受容体拮抗製吐剤 製薬、処方せん医薬品(注意-医師等の処方せんにより使用すること) 薬価基準収載

**プロキシ** 静注 0.75mg Aloxi. I.V. injection 0.75mg

**プロキシ** 点滴静注用シリンジ 0.75mg Aloxi. I.V. infusion bag 0.75mg

パロノセトロン塩酸塩注射液 製造販売元 大鵬薬品工業株式会社 TEL.011-8444 東京部〒100-8452 FAX.03-3293-2451 http://www.taiko.co.jp/ 2013年7月作成

シオン病床99床です。脳神経外科常勤医師は、谷崎義生(昭和50年卒、副院長)、赤路和則(平成5年、脳神経外科部長)、狩野忠滋(平成13年、ガンマナイフセンター長)、志藤里香(平成16年卒)の4名です。病院理念は、「愛・和・学(あいわまなぶ)」であり、「愛」患者さんに対してやさしさといわわりの心を持つ、「和」職員は互いに助け合い協力しあう心を持つ、「学」自分自身に対して向上心を忘れず学ぶ心を持つ、です。

当院では、開頭手術だけでなく、脳血管内手術、パーキンソン病などに対する機能的脳神経外科手術、ガンマナイフ治療など、患者様の病態に合わせた術式を組み合わせて手術しています。当院は、日本脳神経外科学会の認定医研修教育機関、日本脳卒中学会専門研修施設でもあり、慶應義塾大学神経内科医師、日本

実な手術をするために、MRI・CT・脳血管撮影の画像をフュージョンしたカラー3次元画像を3-D Workstationで作成し、術前シミュレーションを行っています。当院はリハビリテーションスタッフが多く、超急性期からリハビリテーションを行い、平均在院日数の短縮につなげています。

平成25年は、脳神経外科手術総数(ガンマナイフ治療を除く)307例・脳血管内治療総数76例・脳動脈瘤手術68例(開頭クリッピング術28例・脳動脈瘤塞栓術40例)・バイパス手術4例・パーキンソン病などに対する機能的脳神経外科手術36例、ガンマナイフ治療総数115例でした。

医科大学神経内科医師も研修をおこなっており、脳血管内治療では、神経内科医師2名も術者になっております。カンファランス以外でも、脳神経外科、神経内科、脳卒中部門、循環器科の医師で、常に相談・協力しながら診療しています。また、看護師やメディカルスタッフの献身的協力により、和やかな診療体制が整っています。院内の部活動もあり、群馬県民マラソンには、毎年、当院から30〜40名くらい出場しています。地域の患者さまの神経救急疾患に対応できるように、医師、看護師の他、画像診断科、検査科の当直体制も整っています。救急搬入件数の増加に伴い、手術件数も増えてきました。より安全・確

実な手術をするために、MRI・CT・脳血管撮影の画像をフュージョンしたカラー3次元画像を3-D Workstationで作成し、術前シミュレーションを行っています。当院はリハビリテーションスタッフが多く、超急性期からリハビリテーションを行い、平均在院日数の短縮につなげています。

平成25年は、脳神経外科手術総数(ガンマナイフ治療を除く)307例・脳血管内治療総数76例・脳動脈瘤手術68例(開頭クリッピング術28例・脳動脈瘤塞栓術40例)・バイパス手術4例・パーキンソン病などに対する機能的脳神経外科手術36例、ガンマナイフ治療総数115例でした。

私の研究

イグノーベル賞を受賞して



帝京大学医学部  
外科准教授  
新見 正則 (64回)

この度、外科医としては過分なイグノーベル医学賞を受賞する機会に恵まれました。慶應義塾大学医学部の関係者、外科医局の方々感謝申し上げます。イグノーベル賞は23年の歴史がある賞で、毎年約9000件の中から10件が選ばれます。「Make people laugh, and then think」が根底にある選考方針です。有り得ない (improbable) 研究で、ともかく笑いを誘い、一回聞けば1週間後も1ヶ月後も脳裏に残り、かつ考えさせるものでなければなりません。選考委員には実際のノーベル賞受賞者もいて、彼らから壇上で記念品を受け取ります。

今回の受賞に輝いた研究は、マウスにオペラ椿姫を聴かせると移植された心臓が拒絶されないというもの。平均で40日、あるマウスでは90日近く心臓が拒絶されませんでした。そして免疫抑制はドナー特異的で、かつ免疫制御細胞が誘導されていました。モーツ

アルトでは20日、エンヤの音楽では11日で拒絶が生じました。無治療群や、単一振動音、工事現場の音、演歌、尺八の音では8日で拒絶されました。なんとも奇妙な実験ですが、再現性がある実験でした。マウスにも「病は気から」はあり得るかもしれないというメッセージです。

一流英文誌からはオペラという文言を削除すればアクトセプトといわれましたが、オペラという文言に愛着があり、それを認めてくれた Journal of Cardiothoracic Surgery に載せてもらいました。その論文がその雑誌の一年間のベストヒットに輝き、そして世界中から僕のラボに取材がありました。そんなことが今回の受賞につながったと思っています。

イグノーベル賞の授賞式はハーバード大学のサンダースシアターで、ノーベル賞受賞者も参列して行われます。東大の安田講堂で山中先生も出席して執り行

われるイメージです。そんなおかしな、でも実は真面目な研究を楽しもうという雰囲気なんともアメリカらしいと腑に落ちてしまいました。Apple コンピューターが生まれ、そして Google, Facebook などが誕生する素地を感じました。

いろいろな意見を真面目に楽しもうという姿勢は本当に素晴らしいものでした。これからのこの受賞を励みに、免疫と脳と腸をテーマに実験を続けていきたいと思っています。

私事では、2年前にアイアンマンになりました。佐渡国際トライアスロンで3.8 km のスイム、190 km の自転車、そして42 km のフルマラソンを14時間18分で完走しました。4年前までは金槌でした。この出来事でした。これからは improbable な人生を生きてみたいと思っています。よろしくお願い申し上げます。

帰室報告

米国・マサチューセッツ総合病院 留学を終えて



国立がん研究センター  
中央病院・大腸外科  
落合 大樹 (77回)

私は2012年5月から2014年3月まで約2年間、米国・ボストンのマサチューセッツ総合病院・放射線腫瘍学研究室において、腫瘍血管の新生に関する研究を行ってきました。

ボストンには、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学など国際的にも名前が知られた研究施設があり、米国の頭脳と言える場所です。マサチューセッツ総合病院は全米最古の病院であり、米国の生命科学研究所の拠点と言えます。

私が所属した研究室は放射線腫瘍学に属していましたが、臨床部門は放射線治療計画に携わっており、新規分子標的治療薬と従来規分子標的治療薬と併用した臨床試験も幅広く展開しています。研究部門のトップは Prof. Rakech Jain で、彼はかつて慶應医学賞を受賞した故「Folkman博士の流れを汲んでいる angiogenesis の研究分野で世界的権威の1人です。私は、直腸癌および前立腺

癌の放射線治療効果を増強させる機序を明らかにするために、癌を取り巻く微小環境に関する研究をしましたが、研究室内外において熾烈な競争が展開されている事を、身を以て体験する日々でした。質の高い研究の場に接し、研究に没頭する日々を過ごす事が出来た。しばしば自分が外科医であることを忘れ、マウス手術に没頭し、試験管を振る毎日でした。

研究室は、ドイツ人、ポルトガル人、イスラエル人、オランダ人、ロシア人、中国人、と国際色豊かな構成で、人種のるつぼのような研究室でした。科学と同時に米国が多民族国家であることを学びました。

今回のボストン滞在中に、慶應義塾大学医学部関連の会 (ボストン三四会) を結成しました。ボストンには三田会があります。その会員の8割が三四会員でしたので、これまで三四会ボストン支部がなかったことが不思議です。新たに発

足したボストン三四会は土方允久先生 (42回生、泌尿器科) を会長にいただき、福村大先生 (68回生、消化器内科)、武岡正方先生 (72回生、小児科)、柏木哲先生 (76回生、産婦人科) が副会長となられました。その発足のお手伝いをする事が出来たのは幸いです。家族ぐるみで参加できる懇親会を企画しました。私が幹事を務めた第2回目の2013年11月には医師32名、家族を含めて約70名の盛大な懇親会を開催する事が出来ました。海外の一都市でこれだけ多くの三四会員が集う会ができたのも、学術都市ボストンならではと感じました。邦人の海外留学は減少傾向にあると新聞報道されています。これからボストンに留学する三四会員のための情報発信地になればという思いも込められています。

2年のマサチューセッツ総合病院での留学を終え、4月1日からは東京都中央区築地にある国立がん研究

センター中央病院で大腸外科医として勤務を開始しました。大腸外科医として執刀する日々のなかで、これまで私が培った癌と戦う知識を存分に生かしたいと思っています。患者さんに関わりやすい説明を心がけ、医療スタッフ一同、患者さん、そしてご家族の方と癌と向き合い、世界最高

の医療を目指していきたいと思っています。末筆になりますが、留学に際してご高配、ご指導をいただきました北川教授、北島名誉教授、相川名誉教授、長谷川准教授ならびに外科学教室の諸先輩方に深く感謝申し上げます。





追悼

故北條一字先生(47回)を偲んで

埼玉刀林会 会長

JCHO埼玉メディカルセンター 院長

細田 洋一郎 (50回)

北條外科胃腸科院長であられた北條一字先生(慶應で先生は福沢諭吉先生のみということですが大先輩に「君」はおこがましく、敬えて先生と呼ばせていただきます)が、平成25年10月30日にご逝去されました。先生は47回生で、私が外科に入室したときのオーベンでした。即ち、外科の「いろは」から教えていただきました。外科学のみならず、個人的にも大変お世話になり、お酒等いろいろと教えていただきました。



先生は旧埼玉社会保険病院に外科医長として赴任され、この時ご指導いただきました。その後、先生は埼玉県の川口市で開業なさり、以後も埼玉三四会でご一緒させていただきました。先生は埼玉三四会の幹事をなさり、私も病院幹事として埼玉県における慶應医学部の同窓会の仕事を共にさせていただきました。先生は、他の三四会に勝るとも劣らない立派な埼玉三四会名簿を手間を惜しまず毎年作られ、慶應の三四会長から総会の席で毎回褒めの言葉をいただき、今ある埼玉三四会が活発に活動しているのも先生のご努力によるものが大であると感じております。

また、埼玉県医師会の代議員、川口医師会の理事としても活躍なさり、特に禁煙にかける情熱は強く医師会の会議で先生が熱弁をふるうお姿を何度も拝見いたしました。そんな先生を病魔が襲い、平成25年3月頃から胃の不調を感じられ、スキルス胃癌の診断となりました。先生は病魔にも敢然と立ち向かわれ、手術のあと積極的に治療をなさいましたが、その治療の甲斐もなく6か月の壮絶な闘いのあと遂にその生涯を閉じられました。

外科医であり、また大学では胃班に所属しておられた先生はご自分の病気にいつも熟知され、さぞかし無念であったと拝察いたします。しかしながら、医師として立派に成人なされたご子息が北條医院を受け継いでおられると伺っており、先生も納得いくまで頑張られ、静かな臨終を迎えられたことと思えます。先生、安らかにやすみください。

追悼

故今井達郎君(53回)を偲んで

町田慶泉病院 院長

中西 泉 (51回)



今井達郎君が急逝した。私にとって三人称の死ではなく二人称の死であった。なせ君はそんなにも早く逝ってしまったのだろう。私はまだ心中で折合がつかないでいる。今井君とは医学部の二年違いということもあって、私的な場では互いを「今井君」「中西さん」と呼んでいた。しかし学生時代の思い出は無く、君を知ったのは私が外科医になって数年経ってからだったように記憶している。昭和49年卒業後外科を志した今井君であったが、昭和52年から55年までは形成外科に籍を置き、その後再び外科に戻り、出張病院に在籍した。その後、出張病院であった飯田市立病院外科部長久保先生が移籍するのに伴い、後を追って多摩丘陵病院に着任したのが昭和60年であった。私はその2年前に町田原病院(現 町田慶泉病院)に戻っていた。医師不足ということもあって今井君にパートに来てもらうこととなり、彼が院長になってからも止むことなく、それは昨年まで続いた。隔週土曜日であったが気さくに患者に接する彼にどれだけ助けられたかわからない。個人的な信頼が2つの病院の病

病連携にも影響を与え、患者の往来が続いた。また多摩丘陵外科医会では互いに症例報告を行い刺激となっていた。もうディスプレイオンすることができないのは残念としか言いようがない。

しかし今井君との思い出は医療よりもむしろ私的な面の方が多し。読書、文学、スポーツ、食事、余暇の過ごし方などが尽きなかった。一緒に誘い合っただけで、何度食事を共にしたことだろう。みな楽しかった思い出として心に残っている。もう20年ほど前になるだろうか、今井君が実家の都合で開業について迷い、私に相談に来たことがあった。そのとき「いつか今井君が多摩丘陵病院にとって必要な時が来る。辞めずに頑張ったらどうか」といったことを覚えていた。果たして彼が院長になってから外科は人材が集まり隆盛を極めることとなったのを嬉しく思ったのであった。

町田市内の民間病院である南町田病院矢野先生(日本医大卒)、多摩丘陵病院今井君、町田慶泉病院小

生、の3人は気が合って食事を持ち、次回を考えていた矢先の急逝であった。いつも陽気な今井君であったが、その陰に一抹の哀しみを持っていただけないかと付度するけれども今となっては確かめる術もない。私を理解してくれる数少ない友を失ったことが何よりも辛い。残されたご家族の心中も察するに余りありません。御冥福を祈ります。

悼今井達郎君  
憶昔與君餐畫堂  
葡萄美酒玉杯煌  
今宵寂寞人安在  
一別音容追悼長  
憶う昔君と畫堂に餐し  
葡萄の美酒玉杯煌めく  
今宵寂寞として人いづくにか在る  
音容一別すれば追悼長し  
本追悼文は町田市医師会の求めにより草した文に添削加筆したものです。



# 基本問題検討委員会委員長に

## 就任して



日野市立病院名誉院長  
熊井 浩一郎 (46回)

私は平成25年度の改選により、刀林会評議員さらには理事に推された後、はからずも吉野肇一新理事長から副理事長および基本問題検討委員会(以下、本委員会)委員長に指名されました。本委員会は山本修三前理事長が、刀林会の運営に関する基本的な課題を整理し、会則、内規を見直すことを目的に立上げ、自ら委員長を務められました。委員会審議を重ね、会員の資格、退会規定、評議員会議長・副議長の設定、評議員会の位置づけ、並びに総会にはかる本会の事業等を改訂ポイントとして、平成24年度総会で会則改訂が行われました。

吉野理事長は、所信表明の第一に、前理事長が始められた本会会則・諸規定の再検討と整備をあげ、評議員・評議員会の役割、各種委員会のあり方(委員選出方法、任期、運営規則等)の検討を、本委員会に付託されました。すでに、これらの課題を踏まえた会則改定の委員会



### 基本問題検討委員会

- 顧問(刀林会理事長) 吉野 肇一 (44回)
- 委員長 熊井浩一郎 (46回)
- 委員
  - 山本 修三 (38回)
  - 松本 純夫 (52回)
  - 四津 良平 (52回)
  - 上野 滋 (57回)
  - 吉田 一成 (59回)
  - 黒田 達夫 (61回)
  - 矢崎 貴仁 (64回)
  - 渡辺 真純 (64回)
  - 北川 雄光 (65回)
  - 志水 秀行 (65回)
  - 石井 良幸 (70回)
  - 日比 泰造 (77回)

# 刀林賞選考委員長に就任して



東海大学医学部付属病院  
本部長  
幕内 博康 (49回)

この度慶應義塾大学医学部外科同窓会の新理事長に就任されました吉野肇一先生より突然「刀林賞選考委員の委員長に就任するよう」とのメールを頂戴しました。もとより浅学菲才の身であり、このようなお役目はとても無理と思いましたが、しかし2期6年間にわたり立派にその責務を全うされた山本修三前理事長を継承された吉野新理事長は、あの『Yoshinoism』を発揮されて「人員の大幅入れ替えを行い、『新しい刀林会』を作り上げたい」とお話になりました。益々私で大丈夫かと心配になりましたが、①昔から日本消化器外科学会の常任幹事で長年にわたりご指導賜り、②同窓会の理事会でも監事として種々ご意見を戴き、③日本癌治療学会の理事会や用語委員会でも大変お世話になったこと、さらに日頃より心から尊敬申し上げている吉野肇一先生の仰せです。お引き受けした次第です。

さて、(1)刀林賞の存在意義の再検討。40万円/年の出費と選考活動に見合うか。各診療科1名で良いのか。応募が少ない。将来のキャリアとなるか。(2)委員会内規が必要。(3)新委員の選定、など検討するようご下命がありました。そこで刀林賞を受賞でき

### 刀林賞選考委員会

- 委員長 幕内 博康 (49回)
- 委員
  - 市来 潔 (48回)
  - 加藤木利行 (52回)
  - 加勢田 静 (53回)
  - 渡邊 昌彦 (58回)
  - 若林 剛 (61回)
  - 四津 良平 (52回)
  - 吉田 一成 (59回)
  - 黒田 達夫 (61回)
  - 北川 雄光 (65回)

# 刀林新聞編集委員長に

## 就任して



東海大学医学部  
消化器外科 教授  
小澤 壯治 (60回)

このたび、2013年9月より刀林新聞編集委員長に就任いたしました。このような伝統ある大役を前委員長の小平進先生から受け継ぎまして、その重責に身を引き締まる思いでございます。もとより浅学菲才の身ではございますが、職務の重要性を深く認識し、責務の全うに全力を傾注いたす所存でございます。刀林会の先生方におかれましては、ご指導賜りたく何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

委員長の交代に伴い、編集委員を一新いたしました。この場を借りまして、編集委員就任をご快諾くださった先生方に感謝申し上げます。今後は、前編集委員のご指導を仰ぎながら、新委員と一緒に充実した誌面作り鋭意努力いたします。なおこの編集委員会は、臨床・教育・研究で多忙を極める先生方の貴重なお時間を割いて成り立っております。同窓会事務局とも連携を取り、負担軽減を計りつつ、ご協力くださる先生方

### 「刀林」新聞編集委員会

- 委員長 小澤 壯治 (60回)
- 委員
  - 佐藤 周三 (56回)
  - 磯部 陽 (59回)
  - 川村 雅文 (61回)
  - 古梶 清和 (63回)
  - 藤野 明浩 (75回)
  - 大塚 崇 (75回)
  - 下島 直樹 (76回)
  - 秋山 武紀 (77回)
  - 吉武 明弘 (77回)
  - 鶴田 雅士 (79回)

# ホームページ小委員会委員長に 就任して



慶應義塾大学医学部外科  
(一般・消化器)

和田 則仁 (74回)

この度、刀林新聞編集委員会内に新設されましたホームページ(H.P)小委員会の委員長を拝命することになりました。一般・消化器外科の和田則仁です。外科学教室のHPのリニューアルをお手伝いしたこともあり、ご指名いただいたのではないかと考えております。刀林会の情報発信の場として良いものができようという微力ながら精一杯頑張りますので刀林会の皆様にはご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。またご推薦をいただきました吉野肇一理事長、小澤壯治編集委員長、北川雄光教授にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

刀林会のHPには、会員



向けのお知らせと、社会に向けた情報発信の役割があると考えております。総会に参加できない多くの刀林会員にとって刀林会との接点は刀林新聞だけになっていくかと思えます。HPでは新聞を補完しインタラクティブな情報交換の場が提供することで前者の目的を達成したいと思えます。社会との接点はあまり大きくはないと思いますが、刀林会の組織体制や、表彰などは積極的に公開すべきことだと考えております。

会員の先生方のご意見を伺いながら委員の先生方と力を合わせて準備を進めてまいります。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 刀林会ホームページ 小委員会 委員

委員長

和田 則仁 (74回)

委員

大塚 崇 (75回)

下島 直樹 (76回)

吉武 明弘 (77回)

秋山 武紀 (77回)

岡林 剛史 (78回)

## 外科学教室 同窓会係

秋山 武紀 (77回) / 脳神経

吉武 明弘 (77回) / 心臓血管

岡林 剛史 (78回) / 一般・消化器

# 「刀林」編集委員長を辞して



小平 進 (42回)

平成25年12月に発行された「刀林」第102号をもって、本誌の編集委員長および編集委員を退任致しました。

私が編集委員長に就任致しましたのは、刀林会の前

理事長の山本修三先生(38回)のご指示により、平成21年12月に発行された「刀林」第94号からで、4年間委員長を勤めさせていただきましたが、本誌の編集委員には昭和57年11月発行の

「刀林」第38号からなっておりますので、約31年間の長期に亘り、本誌の編集に携わらせていただきました。この間の初期には慶應義塾大学外科学教室の教室幹事、同窓会係などを勤め、

平成4年からは帝京大学医学部の外科教授を12年間勤め、停年退官後は今日まで9年間のアルバイト生活を過ごすという多彩な環境下で生活してまいりました。新聞「刀林」は慶應義塾大学外科学教室の同窓会である刀林会の機関誌であり、刀林会が目的とする会員相互の密なる連絡、人格学識の向上および親睦、そして慶應医学の発展などを達成出来るための手助けとならなくてははいけません。理事長をはじめとして多くの編集委員の先生方と頑張つてまいりました。しかしながら私自身が編集委員ならびに編集委員長を勤めた期間を顧みましても、何かと至らない点が多々あつたと思われれますがご許し下さい。現在、長年続いた編集業

務から離れることとなり、ホツとしておりますが、これまで何とかこの仕事を続けてこられたのも、各時期の刀林会理事長(7名の先生)、一緒に働いてきた多くの先輩・後輩の編集委員の先生方、教室幹事・教室同窓会係の先生方、そして刀林会秘書の本間敬子さん並びに歴代の秘書の方々のご支援があつたからこそであると思えます。退任に際しまして、これらの方々に厚く御礼申し上げます。これからは新編集委員長小澤壯治君(60回)並びに編集委員の先生方により、新聞「刀林」が刀林会機関誌として益々発展していくことを期待致しております。

# 近況報告

## 77回生



国際医療福祉大学  
三田病院

外科・消化器センター

似鳥 修弘

腸班ポストチーフとして足利赤十字病院へ1年間出向した後、三田病院へ赴任し、早7年が過ぎました。三田病院は元の専売病院

で、2005年に国際医療福祉大学が承継しました。もともと東大系列でしたが、北島政樹先生が院長として赴任され、慶應外科が増員となりました。関連病院と違って最初は大変でしたが色々異動があり、今年から池田佳史先生(67回生)がセンター長として赴任されました。また昨年より後期臨床研修医が派遣されるようになり、非常に活気づいています。

自分は、大腸肛門疾患を担当し、原発大腸癌は年間約70例です。また、グループ病院の山王病院と連携しており、大学で見ることで



きなかつた、機能的疾患の手術も多く行っています。大腸内視鏡の師匠や、苦楽をともした同僚にも出会え、とてもハッピーに過ごしています。プライベートですが、3年前気づいたらメタボになり健康に不安を感じ、ジム通いを始め、腹囲73cmの68kgになりました。また、半年前よりゴルフレッスンを習い始めました。ラウンドは全然できていませんが、少しだけ楽しくなってきました。一人娘は、小4となり、塾・ダンス・ピアノなど、忙しくかまってもらえる暇はありません。以上、近況です。これからも慶應外科の発展のため精進したいと思っております。

慶應病院 外来 外科担当表

初診外来 (午前)

一般・消化器外科

月 北川雄光
火 尾原秀明
水 板野浩理
木 神野浩光
金 長谷川博俊
土 竹内裕也

小児外科

月 黒田達夫
火 黒田達夫
水 黒田達夫
木 黒田達夫
金 黒田達夫
土 黒田達夫

心臓血管外科

月 吉武明弘
火 岡本一真
水 岡本一真
木 岡本一真
金 岡本一真
土 岡本一真

呼吸器外科

月 大塚崇
火 大塚崇
水 大塚崇
木 大塚崇
金 大塚崇
土 大塚崇

脳神経外科

月 大平貴之
火 佐々木光
水 三輪点
木 三輪点
金 三輪点
土 三輪点

土 秋山武紀
金 堀山崇
木 堀山崇
水 堀山崇
火 堀山崇
月 堀山崇

◎印 診療部長
○印 診療副部長

特殊外来 (午後)

月 川久保博文

火 高橋常浩
水 坂田道生
木 松原健太郎
金 阿部雄太
土 長谷川博俊

水 後藤太一郎

木 高橋麻衣子
火 林田哲
水 林田哲
木 林田哲
金 林田哲
土 林田哲

金 松原健太郎

月 日比泰造
火 日比泰造
水 日比泰造
木 日比泰造
金 日比泰造
土 日比泰造

土 鶴田雅士

月 鶴田雅士
火 鶴田雅士
水 鶴田雅士
木 鶴田雅士
金 鶴田雅士
土 鶴田雅士

特殊外来 (午後)

月 北郷実
火 竹内裕也
水 竹内裕也
木 竹内裕也
金 竹内裕也
土 竹内裕也

水 高橋麻衣子
火 高橋麻衣子
水 高橋麻衣子
木 高橋麻衣子
金 高橋麻衣子
土 高橋麻衣子

木 高橋麻衣子
火 高橋麻衣子
水 高橋麻衣子
木 高橋麻衣子
金 高橋麻衣子
土 高橋麻衣子

訃報

金腸 鶴田雅士
機能疾患(パーキンソン病) 月1回
脳血管障害 堀口 崇
脳神経(第1,3,5) 秋山武紀
土血管 尾原秀明

編集後記



佐藤 周三 (56回)

刀林の編集委員を再び引き受けて戴くことになりました。このことで、「同窓会」というのは一体なんだろうかと、言うことを考える良い機会になりました。同窓会は単なる仲良しクラブ、単なる懇親会で良いのだろうか？大学の医局に對してどのような関係を保っていったらいいのだろうか？

我々が以前考えていたような、症例数を増やして、手術を数多く経験して自分自身に力をつけるといふことは難しくなっています。以前のように行け行け「どんどん」と言う時代はなくなり、現実には手術の現場を退いている刀林会員の半数以上居ると思われまます。

刀林はただ単に大学の医局の広報機関ではなくて、現医局員、旧医局員を含んだ全ての刀林会員の事を考えて、三面記事ももつと増やして読んで面白いものにしてはと思っています。時には、刀林として現在の医局に對して、「今後の医局はこうなるべきであり、こうあるべきである。」と云うような提言をしていく立場にもあるべきだと考えております。

今後の刀林は、坂の上の雲を見ている世代だけではなく、刀林の会員の大半を占めている既にメスをおいて坂の上からおりてくる同門の役にも立つような働きができれば良いなと思っております。

刀林はすべての会員のために存在しなくてはなりません。また、新しい時代に對処していかねければいけません。新しい時代はこれからどんどんよくなっていく時代なのだろうか。日本では出生率が低下し、今後人口は減少して



Advertisement for Zeoroda 300 (カペシタビン錠) by Chugai Pharmaceutical. Includes text: 抗悪性腫瘍剤 劇薬、処方せん医薬品(注) 薬価基準収載. Image of the medicine box.

Advertisement for Prograf (タクロリムス水和物製剤) by Astellas. Includes text: 免疫抑制剤 (タクロリムス水和物製剤) 薬価基準収載. Image of the medicine box.